

題字 北浜名一雄

第 20 号 昭和56年 5 月 15 日
発行者 群馬県山岳連盟
〒371 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL (0272)23-1111 内線519-520
群馬県観光課内
編集者 群馬県山岳連盟編集委員会
責任者 川辺柳一
印刷所 コオシン印刷所
定価 1部 100円

「あかぎ国体に向って」



常任理事 太田忠行

昨年一年間かけた会場地調査も、各会の強力な御支援を得て、ようやく報告書をまとめることができた。基本的な考え方は、競技山城を最小限に押えることによって、輸送、宿泊、その他の面で競技役員、行動の軽減を図り、競技時間を短縮し、審判をやり易くすることなどであった。

そのことから生ずるマイナス要素、すなわち、競技コース上での隊の交差や、同一コースを同じ方向に二隊で使用する問題などについては、競技運営のうえで解決したいと考えたのである。例えば、スタートの時間をずらしたり、交差地点（時間）を予想して、選手がすり違える地域で、広く危険のない所をこれにあてる。交差時間審判付近では評価しない。また、特別評価の区間を別に設けることなどであった。

日程とコースの組み合わせの關係から、踏査会場は、三か所となった。この調査をたたき台として、場合によっては、組み合わせを若干変えることも考えられるが、今年は、この基本方針を踏まえ、更に、調査を続け、縦走では特に競

技時間がどれくらいかかるか、踏査では、できるだけ林道を少くしたコース作りを検討したいと思っている。登攀会場は、赤沢南壁にいたから既に承知の方も多かったと思うが、平均傾度は約八〇度であり、国体の競技では、ちよつときつかとも思っている。本県開催の時は、このくらいの傾度で行いたいのであるが、全国的なレベルから見ても、やはり少し問題もあるかと考えられるので岩壁の下部を掃除して使うことになるだろう。これら会場地作りは、日山協に資料を提出して指導を受けながら進めていかなくてはならないのである。

現在、各地区を巡回して、あかぎ国体での競技役員などの協力方と山岳競技そのものの周知徹底及び、国体強化選手の推薦方をお願いしているところである。

競技役員については、全県的ムードで国体の機運が高まってくれば、一部例外を除いて、どの職場でも出やすくなってくると思われ、皆さんから心良く協力していただけることと期待している。

選手については、各会の指導者が、国体登山の現状を認識し、時代の流れを的確にとらえて、真剣に考えていつて頂きたいと思っている。そのうえで、強力な選手の推薦をお願いしたい。

山岳競技も、昨年の栃ノ木国体から、正式種目となり、このことは今まで機会あることに述べてきたところであるが、昨年あたりから、よその県では、相当優秀な選手を送りこんできている。選手の中には、海外登山の経験者もいるし、ある県では、国体で優秀な成績をおさめることが、山岳協会の至上命令であり、次の海外登山への布石であるとはつきり言っている。

この様に意識の面で他県のほうがはるかに進歩的で、時流を捉えることに機敏である。遅かれ早かれこの風潮は、一般化するのにそれ程時間のかかることではなさそうである。

今回実施した、地区説明会に關しても、出来るかぎり多勢の人達に接して話をしようという目的に反し、参加者が少ない地区も認められたことは残念で、これでは代

表者だけを集めて一回だけ催しても同じことである。

この様に対応の仕方については、ましまちまのように受け止めたが、五十八年の本番までには、ぜひとも積極的な協力態勢が整えられることを切望する次第です。

山岳連盟が丸一となってことにあたられば、あかぎ国体を成功させることはもちろん、本県岳人のレベルの高さを示す良い機会ともなり、今後の益々の発展に寄与することは間違いないことである。

競技役員研修会 催される

日時 二月二十八日・三月一日
場所 県民会館
講師 坂口三郎氏（日山協）
小村守志氏（栃ノ木岳連）

国体に関し、主として準備と運営について講習がなされた。

始めに、坂口講師から山岳競技全般について説明がなされ、次に小村講師から栃ノ木岳連の栃ノ木国体における準備の進め方、その際使用した、各種資料の説明をして頂いた。

講師の方は、共に栃ノ木岳連の理事長、副理事長の要職に有り、中心となって活躍されただけに、貴重な内容が多く、参加された六十数名の受講者にとって、意義深い講習会となりました。

栃ノ木の場合、開催自治体との間で大変苦勞されたとの話ですが、群馬ではそのような事のないよう願いたいものです。

ばう大な資料は、あかぎ国体の準備に、大変参考になるものが多い、大いに活用させて頂きます。

「多忙の中、二日間にわたり講義をして頂いた、講師の先生方には厚くお礼申し上げます。」
県事務局の熊倉氏には大変お世話になりました。

昭和五十六年 第一回理事會報告

日時 四月八日 PM 7:00 ~ 9:00
場所 体育協会館

議題 国体対策年間計画の検討
定例理事会でしたが、討議内容は今年度の、国体関係活動計画の検討が主でした。

今後はあかぎ国体に向けて、岳連活動が行なわれます。いよいよ実行委員会を発足させ、具体的な準備の段階にはいります。

石井理事長の要望で、今年度の活動内容の主なものとは次の通りです。

一、理事長の要望事項
本来岳連の活動目的が国体になることは明らかですが、あかぎ国体を成功させ岳連の社会的評価を高めることで、今後の活動を進め易くなる。そのためには、岳連活動の主体を国体におき、加盟団体も出来る限り同調してもらいたい。

二、実行委員会の発足
現在の対策委員会を発展、解消し、四月末日までに各会から推薦された実行委員会を主体に委員会を編成します。その後は、担当を分担し、担当毎の活動計画を立案してもらい、地元を主体とした合同実行委員会と連絡をとりながら、

具体的活動にはいる。

二、審判員の養成
競技に必要な、審判員の実数が大巾に不足しているため、今年度は二種指導員の養成を行ない、その中から審判員の資格をとってもらい、そのための具体案を立案し実行する。

三、選手強化
あかぎ国体では、なんとしても良い得点を得なければならない、このことは開催県の宿命であり、強い選手を育成することが大切なこととなる。

加盟団体では、優秀な選手を送り出してもらいたい。

四、理事会の開催
三月毎に理事会を開催していましたが、六月の実行委員会の発足までは、毎月理事会を招集する毎月第二水曜日

嶺呂のいわれ

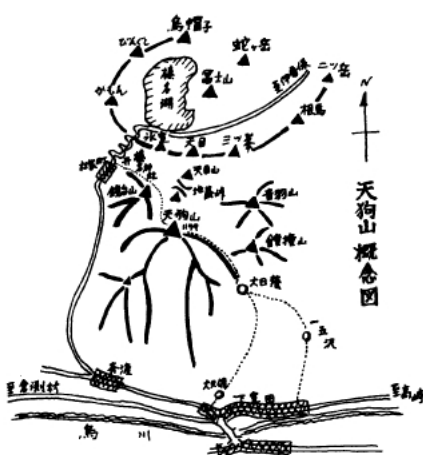
嶺呂とは、万葉集の中に出てくる言葉で、嶺は、山々・峰々の意味で、呂は親愛、感動の念をこめて使う接尾語です。万葉集上毛野の歌の中に、「久呂保の嶺呂」（赤城山）・「伊香保の嶺呂」（榛名山）などと使われております。命名者は浜名会長です。久呂保の嶺呂は、黒々とした山頂付近の針葉樹林を遠望しての呼び名で、伊香保の嶺呂は、いかつい大きな山々の意味で、保は高くそびえている様子をあらわし、いずれも麓の人々が、親愛をこめて呼んでいたようです。群馬岳連の会報の名にふさわしいものと思います。

国道十八号線が、高崎市の君が代橋を渡るとき、はるか北西方向が急に開け、その視界の奥に榛名山がある。

東京方面からドライブしてくる人たちは、このあたりで視野が広くなるので、ホッと一息つくという。関東平野の最奥部に立ちのぼるように、ほぼ東西に連なっている野を引く榛名山は、赤城山の美しさとはまた別の味わいがあるように思われる。

この榛名山の山なみは、東寄りから、水沢・二ツ岳・相馬・三ツ峯・天目・・・・など多くの峰が続いているが、その一番西寄りにあるのが天狗山である。

標高一七四メートル。榛名湖の南、地蔵峠を隔て、ほぼ独立峰のようなおもむきで屹立している。山麓一帯は榛名町で、北側に榛名神社がある。榛名町は、その町名に「榛名」の名称を使っているが、町からは榛名山の全容を望むことが出来ない。この天狗山が



＝ かくされた山 ⑬ ＝

榛名・天狗山

高体連登山部

「榛名隠山」になっているからである。したがって、この町民は朝な夕な、天狗山を榛名山として仰ぎ見、生活していることになる。

「天狗山」の名は、天狗が空に向かって横たわっているように見えるところから名付けられたという。天狗山は、また黒門山（ほりのとやま）あるいは、堀之戸山とも言った。この名は、山頂の三つの小峰、剣が峯・堀鳥屋・花鳥屋のうち、中心となる堀鳥屋の「堀鳥」から出たもので、その「ホリトリ」が「ホリノトヤマ」となったのであろう。「堀鳥」は、堀の鳥、つまり鳥のほら、転じて鳥の巣のこのと思われ、鳥が神の使いとしての鳥であるとするならば、鳥と天狗とは結びつくので、その連想から行者が名付けたとも想像することが出来る。

もともと天狗山は、修験者の修行の場でもあったのである。この山の南東にある大日隠部から山頂に向かう途中には、立派な石組をそなえた「お籠り屋」のあとが残されており、講中の登山も盛んであったことがうかがわれる。今でもこの天狗山の講中は存在しており、山頂には、立派な神殿も完成している。講中の人たちのみならず、地元の人々の登山も盛んで、特に、元旦登山は毎年非常に賑わいをみせている。

登山コース

天狗山登山のコースとしては、いくつかのルートが考えられるが、ここでは代表的なものを一つだけ紹介してみたい。

（榛名町・大久保―谷津―大日隠―山頂―社家町（榛名神社））

榛名町までは、高崎駅前より群馬バスを利用する。榛名湖、ゆうすげ、室田、権田、川浦、月並、薬師などの行先を示したバスのみ、どのバスでもよい。また、本郷まわり・里見まわりのいずれでもよく、料金・時間も同じである。（料金四二〇円・時間五〇分）



は、一見に値するものである。大日隠からは、や、広くなった道を北西に進む。二十分程で、天狗山の南東に張り出した尾根にとりつく。天狗山登山の人たちのために、線香をたき身を清めるための場所が設けられている。ここから道は、や、登山路らしくなってくる。指導標もあって、尾根筋へのとりつきをまちがうことはない。一合目、二合目の道標は、高度をあげていく張り合いを持たせる。三月末までは、まだ多少の雪も残っていることがあり、ざくざくと踏みしめる感触がいい。

広葉・針葉樹のいりまじった道をあえながらいく。等高線が込んで、意外に急な登りとなるが、上部にはロープも張られている。大日隠から一時間十分ほどのアルパイトで、岩になっている山頂にとび出す。

標高一七四メートル。さほど高い山ではないが、ここから南、東、西の方向には、何もさえないものがなく、関東平野のひろがり、遠くの連山を望むことができる。妙義をはじめ、甲信越の山々、富士、筑波と飽くことがない。山頂の神殿もさることながら、ここには石像や石塔が多く、この山は、水沢や相馬と同様、信仰の山であることが示されている。元旦の初日の出もすばらしい。

下降路は、山頂の西側にある神殿の手前鞍部より北側に下る。一旦急斜面を下り、等高線ぞいの道をしばらくたどり、鏡台山の東側鞍部より、再び急な斜面をかけ下

構内の東側の道を少し北行くと、滑川のほとりに出る。その右岸を二百メートルほど上流にたどり、橋を渡れば大久保で、道の辺の道を直進する形で北に行く。四つ角をゆるやかな谷を望みながら進むと、まもなく谷津の部落。数少ない家屋が点在している。

ゆるやかな登りにかかり、出発後三十分程の標高三百五十メートル地点に、水場がある。道はひたすら北に向かう。林道を歩くような単調さに、や、飽きたと思われる頃、道は岩城からの道と合流し、そこが十二山神である。草に覆われた石段の上に祠がある。一休みののち、さらに二十分ほどで大日隠に到着する。

にある戸数七、八戸の部落である。名称の「大日隠」からは、暗くじめじめした場所を想像するが、地形的には日蔭でなく、日向である。「ひかげ」の「かげ」は、日、月、灯火などの光、あかりを意味するところから、大日隠の地名は、陽光が充分にあたる、明るい場所ということになる。

十二山神あたりから望む大日隠は桃源郷の趣きがある。しかし、家屋は存在するものの、現在ここに居住しているのは一族だけであり、あとは麓に転住してしまっている。入沢家は、その残った一軒であるが、この家の庭園はすばらしく、はるかな遠景に高崎、中

近景に天狗山の裾を加え、見事な借景を形作っている。庭園の隅にある紅しだれ、さつきの古木

りれば、榛名神社参道の鳥居にとび出す。社家町である。「しゃけ」とは神職の家、神官のこと。ここが榛名神社の神職、神官を中心にした市街を形作っていることを示している。榛名神社盛時は、ここに六十坊もの建物があり、人口も千人近くあったという。今も講中の人や参拝者で賑わっている。

高崎行のバスは、神社の参道下から出ている。現在は、一時間に一本の割合である。時間待ちがあれば榛名神社本殿に参拝するののも一興かと思う。う、蒼とした杉木立の参道は、この神社が由緒ある古い社であることを自然に悟らせてくれる。

バスに乗れば、一時間二十分程で高崎に着く。

★ ★

以上のコースのほか、社家町、榛名神社側からの登路も考えられる。先のコースの逆で、この場合は、山頂までの時間が大巾に短縮される。

また、乗用車を使う場合は、榛名町駒寄より一五沢を経由し、大日隠まで入ることができる。車を大日隠に置き、そこから天狗山往復ということになれば、二時間半から三時間間で充分楽しむことが出来る。

春夏秋冬、四季を通じていつもそれなりの良さをもった山であるが、春の山菜、秋の紅葉は、やはり捨てがたい。

文責・日向野克己（榛名高校山岳部顧問）

岳界通信

国体選手

後期強化報告

あかき国体開催まで余ところ九百日しかありません。この内、選手強化実日数は、百日前後と推測されます。限られた強化日数ではありますが、強化コーチ一同はあかき国体で総合優勝を目標に選手強化にあたっております。

五十五年後期選手強化は、次の通り実施しました。

二月一日 群馬県協会の(少年・成年)内容は、国体山岳競技説明、天気図作成、天気予報、観天望気、説図

二月十二日・十五日(成年男子)八ヶ岳阿部岳岳南麓一赤岳一ジョウゴ沢で縦走と登山訓練

二月二十二日(少年)吉井・山名OLコースで踏査登山訓練

三月一日(成年)谷川岳西尾尾根ラッセル訓練による体力養成

三月十一日・十四日 標名山黒岩で登山競技訓練。審判員有資格者による登山審判実技講習会もかねて実施しました。(国体部)

中央審判員研修会開かる

日時 二月七日・八日
場所 東京奥多摩町氷川
参加者 石井・川辺・太田・水野・女屋(岳連)剣持(水上)

大橋(藤原(境))
奥多摩氷川の国民宿舎に宿泊し、座学と川苔山百尋ノ滝の岩場に於いて、実技研修を受講した。

石井理事長は、栃ノ葉国体の反省会に出席し、一部の人は二日間とも座学でしたが、その他は岩場に移動し、モデルバーナーが演技するのを採点評価し、講評を受けて終了しました。

川苔山周辺では、関東ブロック予選が行なわれる会場となる地区の予定で、また岩登りは、今回の研修会場の一部が使われます。

川苔山は、二月上旬の寒い季節にもかかわらず、大勢のハイカーが訪れ、奥多摩でも人気の有る山の様です。

理事長などは、川苔川の名に引かれ、川苔を求めて歩いた様ですが、今では取りつくされてしまい収穫なしとか。また帰りには、たまたま人間のアクロバット飛行隊(ブルーインパルス)の最後のフライトを見学する機会にも恵まれ楽しい事も有りました。

国体についての地区説明会を開催

三月十八日の高崎地区を皮切りに、県内を八地区に分け、高体連を含めて九回に及ぶ説明会を、競技部が主体となつて行なつた。

これは今後、国体に協力してもらうにしても、内容の理解が得られなければならないと考え、出来るだけ多数の人達に直接説明することで、理解を深めてもらえるものと考へ実施したものです。

前橋山岳会

インドヒマラヤへ

前橋山岳会では、会の創立四十周年を記念として海外の山へ登つてみようとして現役会員が、二、三年前からインドヒマラヤの資料を集め、色々準備してきてました。

最初の段階では、C B 山群C B三二と言ふ事で計画が進められ申請書を提出して許可返答を待つて居りましたが、許可が遅れた為に計画に支障をきたし、やむなく山城を変更しました。現在では変更した山、インドヒマラヤ、スワルガロヒニ、六二五二米峰の登頂めざして、会員、隊員共準備に張切つて居ります。又群馬県山岳連盟の後援を戴き感謝するとともに事故なきよう、その他、岳人として恥かしくない行動を取る様、心がける所存です。

国体選手予選会

県民大会第二部山岳競技

昭和五十六年度の第三十六回国民体育大会は、十月中旬、滋賀県比良山系に於いて行なわれるが、その県予選会が四月十八日十九日の二日間わたりに奥妙義山仲木沢周辺で行なわれた。参加選手は少年男女、成年男女合わせて四十名が参加し、地元松井田山岳会の協力を得て安全に健闘することができた。競技の内容は体力と歩行技術による速さを競うもので、第一日目のコースは龍沢右股から丁須岩下部までで鎖場を含む変化のあるコースで、下山後は広河原にて幕営。第二日目は谷急沢から大遠見峠を経て三方境より広河原まで行なわれた。選手は規定重量の荷を背負い(成年男子で二十五kg)約二時間位を歩行したもので、二年後に本県で開催される「あかき国体」に於いてもこの体力が最も重要視されるものである。

今回の予選会で選出された選手はそれぞれ強化合宿に入っており成年は五月二日・六日まで北アルプス笠ヶ岳・槍ヶ岳までの縦走、少年は奥多摩御岳と大岳で三日間行なわれた。選出された選手は次の通りである。

成年男子 佐藤 光由 ミヤマ山岳会
前川 典明 群馬独峰会
町田 幸男 太田山岳会
森田 雅博 桐生山岳会
成年女子 森下 緑 桐生山岳会

57年に関東高校登山大会を誘致

高校生を対象に関東一都六県に山梨を加えた関東高校登山大会は、輪番制で行ってききましたが、このたび群馬高体連登山部では、東京高体連や同登山部、その他の関係者と協議の末、当初57年に予定されていた大会を57年にくり上げてもらい、実施することになった。これは58あかき国体をひかえ、地元から、リハーサル大会をやつてほしいとの強い要望が県山岳連明を通して行われ、これをうけて登山部内で協議し、同意をしめしたものです。

大会の規模も国体の参加人員とほぼ同じですので、コース所要時間・幕営地の状況・役員の配置など大きな成果が期待出来ます。期日や具体的なコースについては、早急に登山部内で検討をはじめていますが、日程は二泊三日に限られ、縦走型式となります。

高体連登山部の行事も、本年以降はあかき国体を考へて、武尊山・尾瀬を中心に、集中登山(新人大会や指導者講習会なども行い、コースの下調べや整備・リハーサルのくりかえしを計画しています。

六月五・六日は高校山岳部顧問を対象に、武尊山周辺を使つてコース調査を実施しており、また十月九日・十一日の二泊三日で、県下高校登山部の生徒を対象として、集中登山大会(新人大会)を武尊山で行うことにしています。

大谷・水野両氏一種指導員に合格

このたび日本山岳協会から連絡があり、日山協一種指導員に本県では、大谷清(高体連)・水野金太郎(沼田)の両氏が、論文審査を通り見事、合格しました。国体等をひかえ、両氏の二層の活躍を期待します。

人物往来

●女屋慶志(常任理事)
県教委から国体事務局へ岳連の国体事務局長の仕事がおそろそかならないか心配のタネ(高体連)

●岡安茂能(高体連)
伊勢崎から前橋東高校へ山岳部がないので四人の仲間と設立すると意気込んでいます

●谷弘行(ミヤマ山岳会)
柴田義孝氏に替り理事となる柴田さんご苦労様でしたミヤマも国体に向け体制固め強い

●太田忠行(常任理事)
四月より東京地検に転勤、国体委員長が抜けた岳連はこれから大変、岳連の東京事務所長?

編集後記

これから発行される会報の主要な記事は、会員の皆さんがウンザりするほど、国体・コクタイの記事で埋められるでしょう。

何日かは、五十年に一度、必ず通らなければならない、コクタイへの路なのです。それがはからずも二年後に来ます。大きな行事も多勢の人達が少しずつ協力することで成し遂げられます。

そうそう、多勢の人達で、大きなコクタイへの路を造るうではありませんか。その気になれば、会報の国体の文字も心良いものになるでしょう。

今まで以上に熟読していただき情報提供のみならず、資料としても活用されんことを望みます。